

賃金労働者の存在などから、廃棄となった弁当の処理などまで、その弁当の流れを一通り見ていくものになっている。挿絵やクイズがふんだんに使われており、配送トラックや廃棄食品の問題も噛み砕いて説明されている。さらには店長の仕事を疑似体験することで、発注や本社との関係性から、廃棄食品が出てしまうことも理解できる。本論で重要視しているコンビニエンスストアの立場をよく理解できるようにされているのである。実際の注文の模擬体験についての記述を少し抜粋してみよう。同じ店舗で同じ一日にいろいろな条件を考慮に入れて発注した場合の結果が述べられている<sup>16</sup>。

A 店長は 150 個注文しました。注文したお弁当 150 個はすべて売り切れましたが、お弁当を買えなかったお客さんから、文句を言われました。売上は 1 個 500 円×150 個=7 万 5000 円でした。

B 店長は 300 個注文しました。注文したお弁当 300 個はすべて売り切れました。売上は 1 個 500 円×300 個=15 万円でした。

C 店長は 600 個注文しました。注文したお弁当の半分が売れて、半分は売れ残りしました。売上は 1 個 500 円×300 個=15 万円でした。売上から仕入れ代金を引くと今日は赤字です。

発注した数量と仕入れ代金の関係で、売れ残り消費期限が切れてしまった商品が出てしまえば一日の収支でマイナスとなってしまうということまで言及されており、コンビニエンスストアを経営する店長の苦悩が現実にもくした形で体験できる。上記の疑似体験の記述には、「お客さんから文句を言われた」とされている A 店長が、後の記述では近隣の別の店舗にお客さんが奪われてしまったともある<sup>17</sup>。かなり現実にもくした記述になっていることがわかる。

また廃棄処分となってしまう商品があることも、社会問題として以下のように記述されている<sup>18</sup>。

売り場からさげられたお弁当は、どうなるのでしょうか。コンビニでは閉店間際のスーパーや商店のように、ねさげセールをして売りつくすやり方はしていません。基本的にはすべてすててしまいます。それでもお店のイメージと売れ行きのためには、多めに注文しなければならないのが、コンビニ店長さんのなやみのタネのようです。

店長として疑似体験を通して、店長自身の「悩みのタネ」も理解することができる。こ

<sup>16</sup>千葉保 2005 『食べものが世界を変えている コンビニ弁当 16 万キロの旅』 太郎次郎社エディタス pp.39-40

<sup>17</sup>千葉保 2005 『食べものが世界を変えている コンビニ弁当 16 万キロの旅』 太郎次郎社エディタス p.43

<sup>18</sup>千葉保 2005 『食べものが世界を変えている コンビニ弁当 16 万キロの旅』 太郎次郎社エディタス pp.30-31

の「悩みのタネ」こそが、本論が重要視してきた、社会的役割への理解である。このような疑似体験を、コンビニエンスストアの業態や、環境問題との関わりをおさえたいうえで行うことで、より現実的なコンビニエンスストアへの理解をはかることができるのである。

また、店長の立場への理解のために、前節でのインタビューを活用することを考えたい。店長や本社の方の発言は、筆者に対して話した言葉をそのまま文字に起こしたものであるため、そのまま読み物資料として使うことはできない。しかし意味合いが同じでわかりやすく言い換えれば、それも十分に伝わるのではないだろうか。また、近隣のコンビニエンスストアから実際に店長に来てもらい、話しをしてもらうことも出来るのではないだろうか。とにかく子どもたちに理解させなくてはならないのは、店長が「環境問題への対策には、店の経営をないがしろにしてまで取り組めない。」と考えるだろうことである。それがなぜなのか子どもたちに疑問を持たせることで、コンビニエンスストアの立場の人物を知る必要性に気付かせることができる。

コンビニエンスストアを教材とする視点は以上の通りである。ここまで述べてきたことを踏まえて、科学性の高い知識をもって「社会参画」力を育成する環境教育の授業プランを提示していく。